



A L P S CAREER

＜シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第50回＞

30代の私が 地方公務員という 仕事の魅力を 発見するまで

ジェネレーションXの就職

1983年生まれ。カニ座。A型。父親は配達の仕事、母親はパート。ごくごく普通の家庭で育った。ものごころついた頃にパブルがはじけ、どことなく悲観的な社会を過ごしてきたことは後から知った。街に關わっていると「あの頃にもどりたい」ということを聞くけど、私たち世代以降はピンとこないのではないかな、と思う。

世間では、1980年代以降に生まれた人たちを「ジェネレーションX」、過ごしてきた時代を「失われた20年」なんて言うらしい。少しでも納得できるのが、就職を考えたときだった。

「こんなにモノが溢れている時代で、自分

人がほとんどのモノは作ってしまったじゃないか」と悲壮に思い、ほとんど就職活動をしなかった。すべてが溢れて、やりたいことがよくわからないのが「失われた」時代であり、自分だったように思う。

受け身だった自分

就職活動もしていない状況を見兼ねた両親から「市役所の試験だけは受けとけ」と言われた。専攻が英語通訳と教育だった私は、教職員と市役所の試験勉強だけは始めた。

市役所に入ったのは至極単純「親に言われたから」と「教職の試験に落ち、市役所は受かったから」の二つで、今の自分からは想像もできない受け身の理由だった。



荒井 慶悟

富士吉田市まちづくり部まちづくり戦略課

【あらい けいご】1983年、山梨県富士吉田市生まれ。2006年富士吉田市役所に入庁、固定資産税担当、財政担当を経て、慶應義塾大学へ出向。現在、まちづくり戦略課在籍。「愛と責任のもと、公私を融合していくことで、生まれ育った地域がよりよくなっていく」と日々活動中。人が育っていく場に関心があり、ワークショップデザイナー、産業カウンセラーの資格を持つ。

中途半端な思い

多少英語に自信があったので、外国人の対応や看板の表記変更、翻訳、通訳やツアーなど、英語を活かせる国際係に配属されたい、と淡い期待をしていた。

配属先は、税務課の固定資産税係だった。幸か不幸か、これまでの市役所のイメージが一気に裏返った。自分も含め、行政職員の仕事はイージーだと思っている人は少なからずいると思うが、そうでなかった。電話対応、家屋調査、国や県の調査関係と矢継ぎ早に仕事が舞い込んできた。ここでの体験が社会人としてのマナーや基本的な姿勢を学べたことは、後から気づいた。

この頃は、やりたいことがまだはつきりしなくて、英語のスキルも発揮できず、地域

エンターテイナーとして、ライブゲストに呼ばれることも。
このときはゾンビ姿で



に對しての思いもなかったように思う。与えられるだけの日々を悶々と過ごしていた。

— 地域をよくするために
与えられることに
慣れてしまった時代背景

街の課題について、「こうやってほしい。こうしてほしい」と言っている人がいた。その話を聞いて、立ち上がって行動した人がいた。その結果に「こうしてほしいと言った人」が最後に発したのは、「思っていたのと違う。これじゃない」という文句だった。自分でやればいいのに、と思う人がほとんどだろうが、実際に自分の思っていることを行動にうつす人がどれだけいるだろうか。

「こうしてほしいという人」の問題でもあるけれど、自分自身で考え、行動をするという訓練の必要がなかった右肩上がりの時代背景にも原因があると思っている。右肩上がりの税収と住民への還元がセットとなつて、与えられることが当たり前だったと思う。

— 地域をよくするために
必要① 愛と責任

まず、絶対必要なのは、街への愛と責任。私自身の地域に對しての思いが変わつたきっかけは、東日本大震災の支援で被災地に1ヶ月滞在したときだった。ある被災者の方の話聞いた日の夜、生まれ育つた街についてはじめて深く考えた。そのときに、自分の街への愛と責任に気づき、中途半端な思いが消えた。

必要② 自分でつくる。
一人一人の自立

次に一人一人の自立への一歩を踏み出すこと。前述のような「こういったアイデアがある。だから、荒井くんがやって」「ああいうことがしたい！ だから、市役所がやるべき。企業がやるべき」とよく聞いてきた。言っている本人が、当事者にならない、自分ごとにならない場面によく出くわしてきた。本当にその思いを叶える気持があるのであれば、まず自分でやってみる、当事者になる、という行動や姿勢が必要だと思う。

必要③ 客観的に見る能力

自分事になった後は、「客観的に見る」ことが必要だ。例えば、自身の行動や活動のクオリティでお金がもらえるものか、アイデアを伝えるときに共感ができるような言い方で伝えているか、自分のモノサシが間違っていないか問うことができるか。思えばかりを押し付けていないだろうか。と、ちゃんと客観的に見ることを思う。

必要④ 「私と共と公」の
住み分け

そして、自分（私）で引き受けること、みんな（共）で引き受けること、自治体（公）で引き受けることの住み分けをすることが次のステップだ。

自分でできることは自分でやる。しかし、もしその地域の課題範囲が「私」を超えて「みんな（その課題を問題だと感じている人たち）」でやってほしいことだったら、みんながやった方が効率的で合理的だ。

ただ、みんなにも納得してもらわなければならない。自分のモノサシは間違っていないか、相手は共感するか。そこを通過して、はじめて「みんな」でやろう、という共通の課題になる。

さらに、公自治体になると、地域を相手にちゃんと地域が納得する理由を作って

いかなければならないと思う。

この住み分けの考え方は、島根県海士町の「島の幸福論」海士町をつくる24の提案」や市民財団「みんなで作る財団おかやま」の事例と同じだと思っている。関心がある人はぜひ見てほしい。

活動のきっかけ

私自身の活動のモチベーションは、最初のうち、「これやって。あれやって」と頼まれる違和感からくる怒りと疑問だった。そう感じていたので、自分自身が自立してやってみようと動いた。

働き始めてから4年目くらいときだったと思う。もともと、音楽やライブ活動をしてきたこともあり、音楽イベントをしようと同級生や音楽の仲間たちの間で企画が持ち上がったことから始まった。

自分で「つくる」楽しさ

イベント自体より、その過程がとても魅力的だったのを覚えている。自分の責任でお金を出し、どういう広報をしようとか、場所はどうしようとか、集客について考えようとか、来てもらったお客さんにどういう風に楽しんでもらおうとか、コンテンツはどうしようとか、要するに、大変。ただ、ものすごく楽しかった。

ゲージルやネットにはのっていない、自分

で自分が実感した言葉を作っていく感じがした。自分で行動して、自分の責任で「つくる」ということがこんなにもたくさんのこととを教えてくれる！と、衝撃が走った。与えられたもので過ごすより、数倍以上の充実感を感じていた。

自分自身の自立

怒りをモチベーションに企画していたのが、だんだんと充実感を味わう目的へと変わる。大道芸人、ライブ企画、ライブ出演、パフォーマンス、映画撮影、映画上映会、怖い話、ファイアーパフォーマンスイベント、飲み会、PV撮影、トークショー、思いつく企画はなんでも行った。

例えば、映画であれば映画館ではなくて、街の居酒屋さんで企画したり、トークショーであれば、自分の家を開放して、近所の人や両親の友達を呼んで行ったりした。

実行すればするほど、勉強になったし、プライベートの活動なのに「市役所は頑張っているな」と言われたこともあった。なにより自分にとっての学びに繋がっているという実感が、自分を動かしていった。

時には、企画が失敗して、自身の財布から損害分を補填することも多々あったが、成長への投資だと思っただけでなかった。

最初の音楽イベントから4年間で1000個以上は企画、実行をしたと思う。東日本大震災以降は、街への愛と責任の気づきと

ともに「自分がシェアできることは？」「日本一周、世界一周した人と考える地域の魅力」など街へ繋がるテーマ性をもって、トークショーや家をオープンにする住み開きなどを重ねていった。

公私融合の一步

週末をそういった活動にあててきた私は、なんだか平日の自分が嘘のようだと感じていた。公私の隔たりなく、活動をしたいと段々と思ってきた。

ある日、市役所は市役所、プライベートはプライベートと猫を被って使い分けてきた自分を、さらけ出すことに挑戦した。ある先輩に「自分は街で企画をしているのだけれど、ぜひ一緒にしませんか？」と。

先輩の返事はOKだった。今後、この先輩が地域で活動を始めて、どんどん変わっていく様子を見ていった。さらけ出すことは「あり」で、自分の中の成功体験に変わった。そして、猫を被ることをやめて、職場に対して裏表なくオープンになっていった。

慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパスへの出向

富士吉田市と慶應義塾大学は連携協定を結んでいて、様々な調査研究を行っていた。財政の担当をしながら、事業の手伝いをし

市民財団主催のイベントでは、浴衣姿で司会を務めた



ていた私は、ある日「慶應義塾大学へ出向しないか」と上司から声をかけられた。自身の活動をオープンにしたことで誘いがあつた、と勝手に思っている。

その後、調査研究に入っていた慶應義塾大学の研究員から、出向のタイミングと一緒にシェアハウスを立ち上げようと誘われた。もちろん首を縦にふり、シェアハウスの立ち上げ、運営を始めた。出向中も積極的に住み開きや富士吉田に関わるイベント、話し合いなどを、シェアハウスを通して行い、多くの人との繋がりをもった。

1年後、シェアハウスで関わりの深かった

3名を引き連れて、富士吉田に戻ってきた。

共と公の仕事

出向から戻ってきてからの3年間はお盆休みと年末休み以外はほとんど休みなく、街と関わってきた。富士吉田に移住してきた3名の内、2名は地域おこし協力隊として「空き家の利活用」と「地域の食文化の情報発信」を、1名は一緒に市民財団の立ち上げを行った。

社会課題が拡大化、多様化していく中で、公や企業のサービスだけで問題を解決していくことは、もう不可能だと思う。これからは、「私」の自立だけでなく、「私」や「共」を支援する団体が必要だと感じて市民財団、つまり中間支援組織を発足させ、運営を始めた。

他の市民財団と違うところは、財団自体も積極的に事業を行う点だ。デザインコンペティションの開催、インバウンドツアーの開催、市民活動支援、移住定住支援、地域産品の商品開発など活動は多岐にわたる。

一方で、市役所では地域資源の洗いなおしを行い、リデザインして発信していった。富士山1合目から5合目のモニターツアーや、地下水調査を通じた水に関するフリーペーパーの発行、御師文化が残る街を活用したイベントなど、地域資源に関わる仕事をしてきた。

3つの顔

自身の活動を3つに分けると「市役所」「市民財団」「街中でイベントを考えるエンターテイナー」としての顔を持っていると考えている。3つの領域を横断して、街への愛と責任を日々、表現している。

20年後の社会

3つの顔で関わるメンバーとは、現在のことでなく、20年後を考えると仕事をしようとしている。20年後の現役世代が本当に必要なモノやコトだけを残していきたい。

人口減少や社会課題が拡大化、多様化して、今までの前提、特に右肩上がりの高度経済成長を基本とした考え方が行き止まりになって、低成長を前提とした、今までの根本がひっくり返る社会の入り口に来ていると感じるからだ。

尊敬する県外のある青年会議所の方が「もう待っている時代じゃない。30代や40代、これからは担う人たちが主体的に動いていかなければならない」と言っていた。別の尊敬する人物も言う「一人の百歩より、みんなの一步」。

これからは、本当に一人一人が自立していき、「私」も「共」も「公」も「企業」も全員で社会の課題に取り組んでいかなければ、間に合わない。

— 地方公務員の魅力 —
地域の未来を軸に考える

「地方公共団体は、住民の福祉の増進を図ることを基本として、地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を広く担うものとする」

「地方自治法 第一条の二」がすべてを物語っていると思う。住民の福祉の増進を図ることは、対立的、もしくは多元的な背景をもつ課題を、関わる人が納得する落とし所をファシリテートして決めていくことだ。落とし所の軸は、「個人の損得」ではなく「地域の未来」という切り口で展開していくべきだと思う。これこそ、地方公務員でな



市役所内で行っていた座談会を街中のイベントで開催。ファシリテーター役を務めた

なければならない仕事だ。

なぜなら、自分自身・家族・仕事・恋愛・趣味・地域から派生する課題はたくさんあって、自分自身や家族や仕事の比重が大きく、その文脈の「損得」に沿って主張されてしまう。地方公務員であれば、「仕事」と「地域」を重ねて、「地域の未来」を軸にファシリテートしていくことができるからだ。

また、移住者ともたら住んでいる人を繋げたり、「経済」という根本をもつ会社のリソースと社会課題を繋げたり、出会いがないという人と人口減少問題を繋げたりする。生活に密接に関係し「地域」に足を突っ込んでいるからこそ、異なるジャンルをマッチングできる存在でもあると思う。

3つの魅力

地方公務員の魅力は、「自分自身の仕事と地域を重ねて、仕事ができること」「自分のプライベートな活動までも、地域にとつてプラスになること」そして「首にならないからこの挑戦ができること」だと思っ

挑戦しよう

就職活動で勝手に悲観的になっていた私と、この文章を読んでいる鬱屈とした気持ちをもつ読者に伝えたいのが「まず、やってみないとわかんない」ということ。自分の責任で行動して、自分自身が実感することで、

方向性のカケラを少しずつ集めていけると思う。そこではじめて、仕事の魅力にも気づいていける。

行動していると誰かに色々言われると思う。「やりたいことがわからない」「何のためにやっているの?」。うまく企画がまわらなくてチームの和が乱れることもあると思う。私たちがケンカしたり、その状態に疲弊したりした時期もあった。けれど、歩みを止めず、やり続けると、必ず見たことのない景色があなたを待っているはずだ。

次に「地域への愛や責任を表現する場所は、職場だけではないということ」そして「組織や誰かのせいにするのはやめよう」ということ。

自立への一歩を踏み出すことが、必ずこれからの社会でも、自分自身にもいきでくることは、私自身の体験から言えることだ。

最後に

私の座右の銘は「踊るあほうに、見るあほう、同じあほうなら踊らにヤンソン」。どうせあんまり変わらないのなら、踊ってみたほうが様々なことが勝手についてくる。仕事の魅力を発見したことも、その中の一つに過ぎない。

ここで村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』の例でも出したほうが知的でウケもよかったかもしれないけど、自分はあほうだからちよんじい。